フロンティアスクール報告書

都道府県名　広　島　県
市 町 村 名　双三郡三和町
学　校　名　三和町立三和中学校

Ⅰ．学校の概要

双三郡三和町立三和中学校						
	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学　級　数	１	１	１	０	３	１４
生　徒　数	３１	３３	３２	０	９６	

Ⅱ．実践研究の概要

１．主題（テーマ）

「意欲的な学習活動をうながす指導」
～個に応じた指導方法等の工夫改善をとおして～

２．内容と方法

（１）実施学年・教科

１年２年３年　国語　数学　英語　（ＴＴ指導，少人数指導，習熟度別指導）
複数の教科担任がおり，生徒の学力差が出やすい教科
１年２年３年　理科　美術　音楽　社会　（一斉指導）
英数国のＴＴ指導，少人数指導，習熟度別指導と一斉授業との成果と課題を循環しながら実践したいため

（２）年次ごとの計画

平成14年度

○（テーマ）
・基礎・基本の定着を図る
・指導方法・指導体制等の研究

○仮説
「個に応じた」学習の場を再構成・展開し，表現活動をとおした関わりの場において，達成感や次への自信をもたせるような指導のあり方を工夫すれば，基礎基本の定着が図られ，子どもの学ぶ意欲を高めることができるであろう。

○研究内容・方法
・次のような４点を研究主題達成のための重点として位置づける。
ア　学習意欲や態度の育成
イ　基礎・基本の定着
ウ　個に応じた指導
エ　表現活動による対話
・少人数指導，Ｔ・Ｔ指導，習熟度別指導など指導方法の工夫
初年度は，国語・数学・英語において導入する。
単に学び集団の人数という量的側面だけでなく，生徒一人ひとりがいかに楽しくわかりやすく学ぶことが出きるかという学びの質を重視する。

平成15年度

○（テーマ）
・小学校・中学校連携による基礎学力の充実
・価値観を磨き合う「他者評価」のあり方

○仮説
・義務教育９カ年を見通した教育活動を展開することで，確かな学力と新しい学びの開発ができるであろう。
・表現活動による対話を通して培われる他者評価は，自己評価と相互関係にあり，自己評価能力を高めるであろう。

○研究内容・方法
小中学校連携による基礎学力の充実
・授業のあり方の視点，学習の心得等，共通認識の上に立って実践していく。
・発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための「つなぎ教材」の開発
・小中連携における組織的な運営←①
次の３部会を構成し，連携を取りながら研修を進める。
・教育課程部会
・学習環境部会
・基礎・基本部会

『表現活動による対話』を通しての学力の充実
・表現，交流，探究（練り合い・磨き合い）等，構造的に細分化し各教科の特色を生かしながら研究推進を図っていく。←②
・活動と評価の一体化を考え，他者を評価していくプロセスを通して，内発的意欲や共感的資質を喚起させていく。

＊←①
昨年度の実践交流，共同研究を踏まえ，一貫した学び教材の開発や教育課程・学習環境について，全教職の英知が結集できるようにするため。

＊←②
全教科を通して，研究構想図にもとづいたぶれのない実践ができるようにするため。

平成16年度

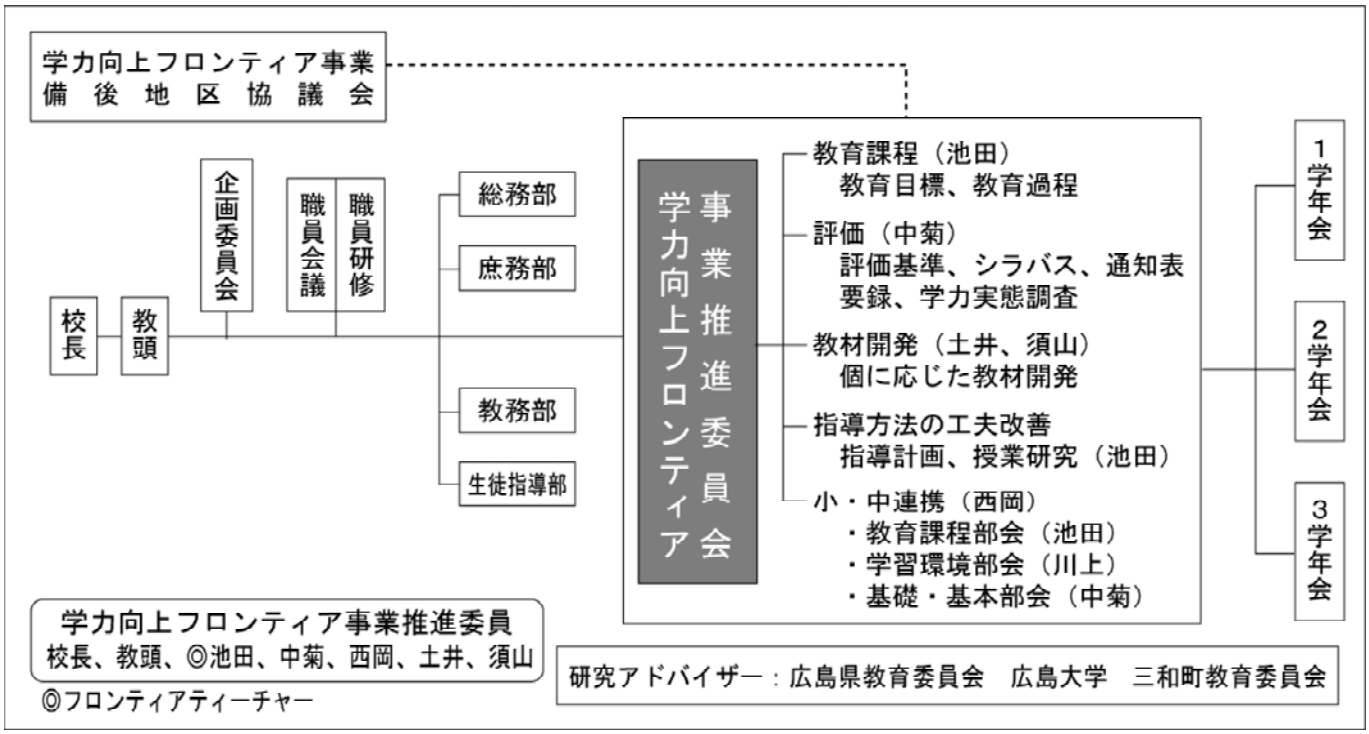
○（テーマ）
・個に応じた教材の研究開発のまとめ
・個に応じた指導方法等の工夫改善

○仮説
・基礎・基本的な知識・理解を身につけた生徒に対して，内発的意欲とコミュニケーション能力を喚起するような教材や指導法を工夫すれば，思考が促進されより一層思考力・判断力が磨かれるであろう。

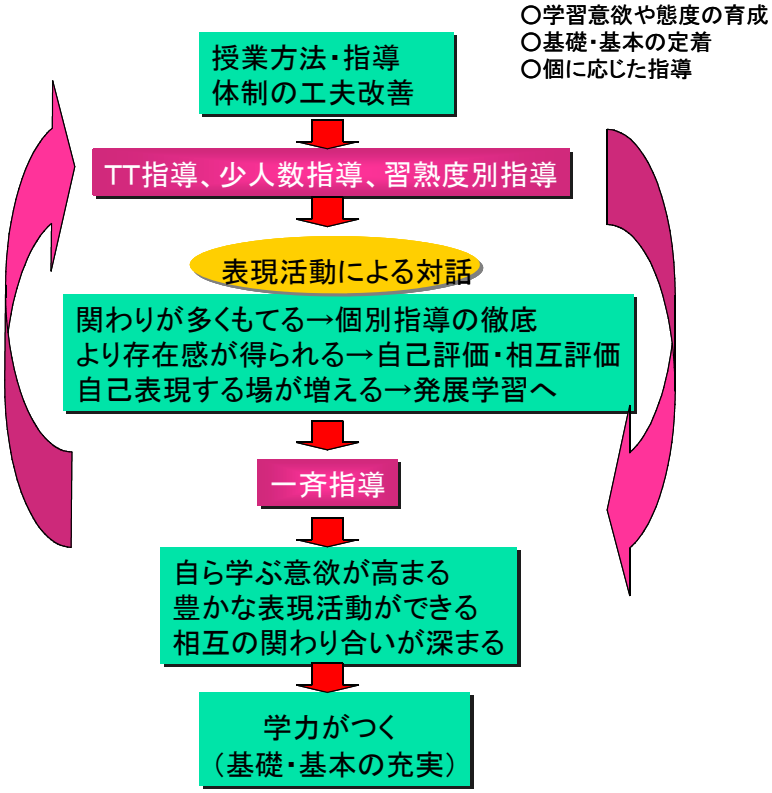
○研究内容・方法
・発展的学習，補充的学習，意欲を喚起する学習教材の開発と蓄積
・少人数指導等を通して出てきた成果や課題を一斉指導に生かし，相互の指導体制を循環させる中で，全教科を通じて共通の研究視点や授業づくりの方向性を確立する。

（３）研究推進体制

①校内実践研究組織図



②校内研究体制の工夫（全教科による研究体制の循環）



生徒は，学習能力，知識，生活体験，興味・関心等の違いから，一つの学習内容についても理解の程度や興味・関心による差，または発想や思考過程の違い等から様々なつまずきが生じてくる。それらに対して従来の一斉指導の良さを生かしながら生徒一人ひとりの学習支援の時間を多くし，個に応じた指導ができるよう，指導方法・指導体制の工夫改善を行い，生徒の学力向上への支援を展開する。

また，学び集団の人数という量的側面に頼った少人数指導では，基本的な知識・技能を習得・定着させる上ではある程度有効であるが，ややもすれば思考のプロセスが「前にもどる」ことを好まない傾向の中(昨年度本校の課題）で，ここに働く思考力や判断力は低次なものになりがちである。多面的思考力を深め学習意欲をより高めていく上では，表現活動を通しての他とのすりあわせの中で自己の個性を自覚させる必要があり，集団としての学習の意義を踏まえる上でも，「表現活動による対話」が重要になると考えられる。

このように，少人数指導等を通して出てきた成果や課題を一斉指導に生かし，相互の指導体制を循環させる中で，全教科を通じて共通の研究視点を明らかにしながら取り組んでいく。

③小中連携全体構想図（基本構想と組織体制）

三和町教育研究会・・・三和小学校，三和中学校等教職員

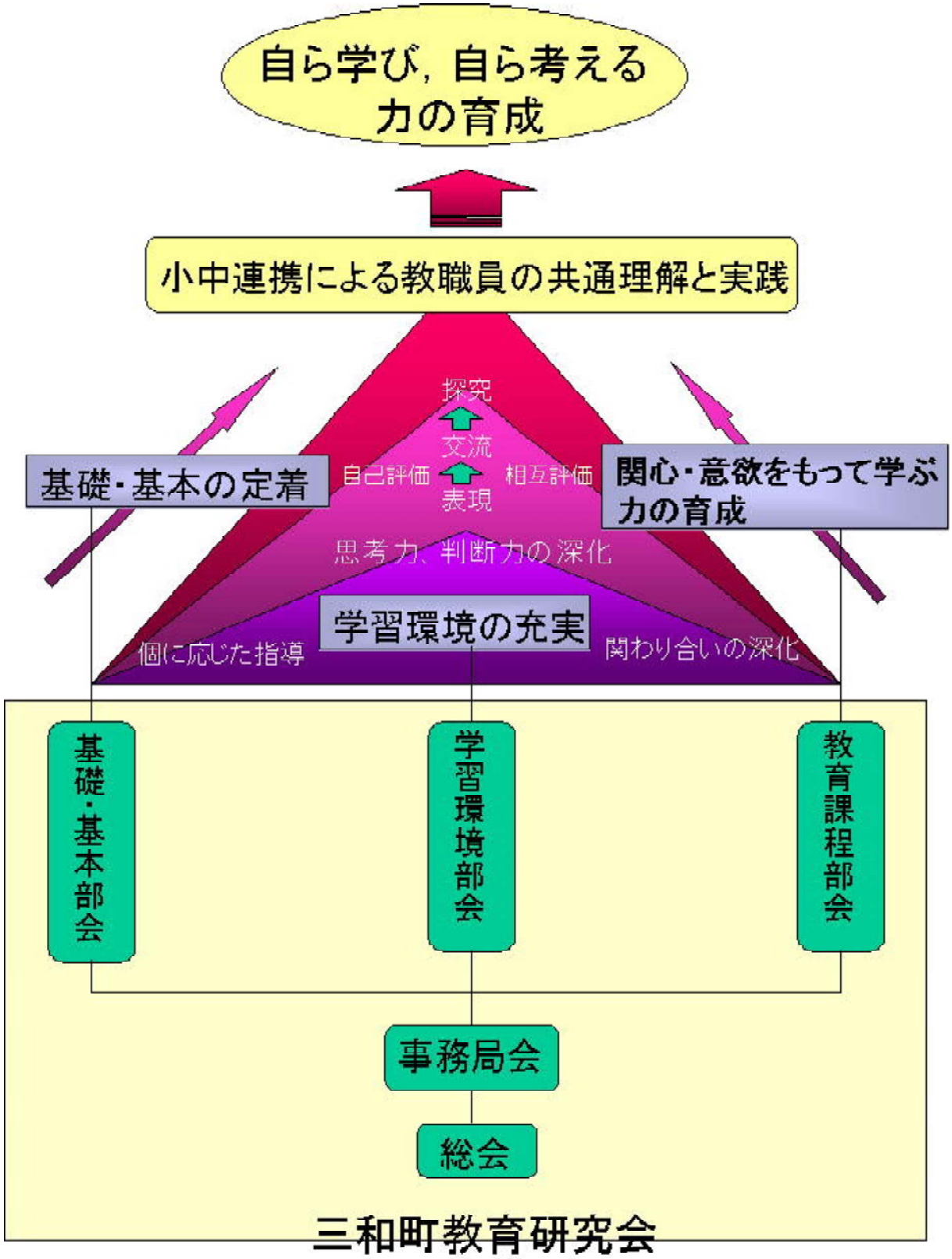
○小学校・中学校が連携した教育力を生かした教育活動の展開

○異年齢間または異校種間の学び合いによる連携

○義務教育９年間での基礎・基本の確実な定着

○義務教育９年間で育てる学びの目標づくり（自己の到達目標）

○学習集団づくりと基本的生活習慣の確立



Ⅲ．平成１５年度の成果及び今後の課題

１　研究成果

○『表現活動による対話』を中心にした学習活動は，それぞれの指導形態を好む生徒の違いがなくなり基礎・基本の定着，とりわけ思考の領域での学力の伸びが見られる。
○学習内容によって学習課題別や解法過程別を交互に指導する少人数指導は，解法の定着に有効である

（１）研究前の児童生徒の状況及び課題

各種の授業形態に対する意欲の相互関係（H14．9全校）　表1

		TT授業意欲	TT授業意欲	自主選択コース授業意欲	進度別コース授業意欲	一斉授業意欲	グループ別授業意欲
TT授業意欲	相関係数	1	.229(*)	−0.015	0.051	−0.02	0.056
少人数授業意欲	相関係数	.229(*)	1	.235(*)	.324(**)	−.218(*)	0.025
自主選択コース授業意欲	相関係数	−0.015	.235(*)	1	0.082	−0.045	−0.023
進度別コース授業意欲	相関係数	0.051	.324(**)	0.082	1	−0.142	0.078
一斉授業意欲	相関係数	−0.02	−.218(*)	−0.045	−0.142	1	0.125
グループ別授業意欲	相関係数	0.056	0.025	−0.023	0.078	0.125	1
* 相関係数は 5% 水準で有意（両側）							
** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）							

《情意的側面》表1

前期に実施した指導形態と学習意欲に関する調査においては，少人数指導と一斉授業は負の相関が見られ，一方を好む生徒は他方を好まない傾向があった。例えば，少人数指導を好む生徒は一斉指導をあまり好まず，自分のペースで進むことがよいと考えている生徒は，自分の殻にこもりがちになる傾向もみられた。すなわち，結果に至るスマートな解法のみを求めがちになり，仲間との交流や試行錯誤を望まない実態が考察された。

《認知的側面》表2

平成１４年度広島県「基礎・基本」定着状況調査では，県平均に比べ一部領域によっては，表現・処理知識・理解の観点がマイナスポイントのところもみられるなど，繰り返し指導による基礎・基本の徹底や家庭学習の充実等が求められていた。

平成14年度「基礎・基本」定着状況調査3年表2

数学	県平均	H14.6	県との差
表現・処理	69.7	66.1	－ 3.6
知識・理解	46.1	42.6	－ 3.5
見方・考え方	43.8	50.6	＋ 6.8
全　領　域	59.0	57.7	－ 1.3

（２）現在の児童生徒の状況

各種の授業形態に対する意欲の相互関係（H15．3全校）　表3

		TT授業意欲	少人数授業意欲	自主選択コース授業意欲	進度別コース授業意欲	一斉授業意欲	グループ別授業意欲
TT授業意欲	相関係数	1	.204(*)	.375(**)	.218(*)	0.175	.282(**)
少人数授業意欲	相関係数	.204(*)	1	.271(**)	.284(**)	−0.015	.295(**)
自主選択コース授業意欲	相関係数	.375(**)	.271(**)	1	.357(**)	.273(**)	.229(*)
進度別コース授業意欲	相関係数	.218(*)	.284(**)	.357(**)	1	0.117	.251(**)
一斉授業意欲	相関係数	0.175	−0.015	.273(**)	0.117	1	0.117
グループ別授業意欲	相関係数	.282(**)	.295(**)	.229(*)	.251(**)	0.117	1
* 相関係数は 5% 水準で有意（両側）							
** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）							

表3の後期の調査においては，全体の相関の高まりが見られ，それぞれの指導形態を好む生徒の違いがなくなってきた。このことは，『表現活動による対話』を中心に全体的に多様な指導法のもとでの学習活動に生徒がうまく適応しつつあるとも考えられるが，どのタイプの授業にも意欲的でない生徒について，さらに具体的な手だてを考えていく必要がある。

「基礎・基本」定着状況調査　（平成14年度）　　（平成15年度）**表4**

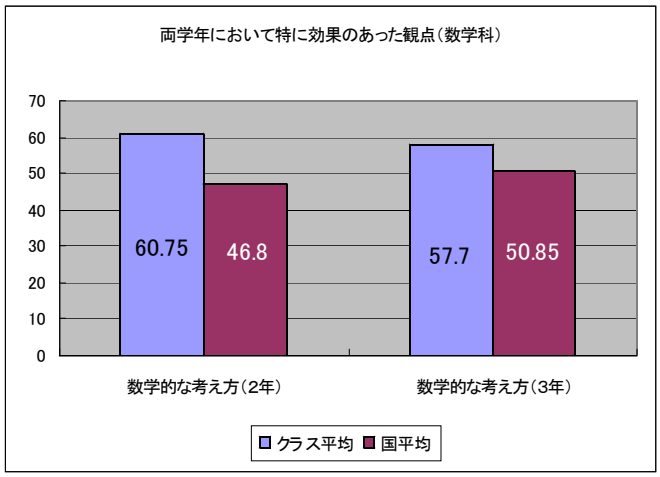
数学	県平均	H15.2	前回との差	県平均	H15.6	県との差
表現・処理	69.7	76.9	+10.7	71.6	81.0	+ 9.4
知識・理解	46.1	50.3	+ 7.6	62.9	84.4	+21.5
見方・考え方	43.8	60.0	+ 9.3	52.5	76.0	+23.5
全　領　域	59.0	67.5	+ 9.8	64.9	80.6	+15.7

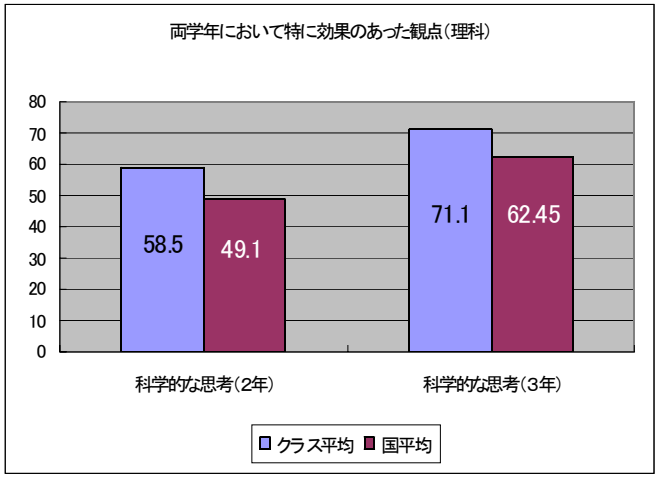
表4の（平成14年度）は，現３年生が半年ちょっと経って同一調査問題を行った結果である。「見方・考え方」はなかなか伸ばしにくい領域であるが，表現活動を通して横に広がる集団思考を全教科で常に意識しつつ模索しながら実践した結果，学力調査の通過率の変化（**表2との比較**）にみられるように他の領域と同様の伸びを示している。

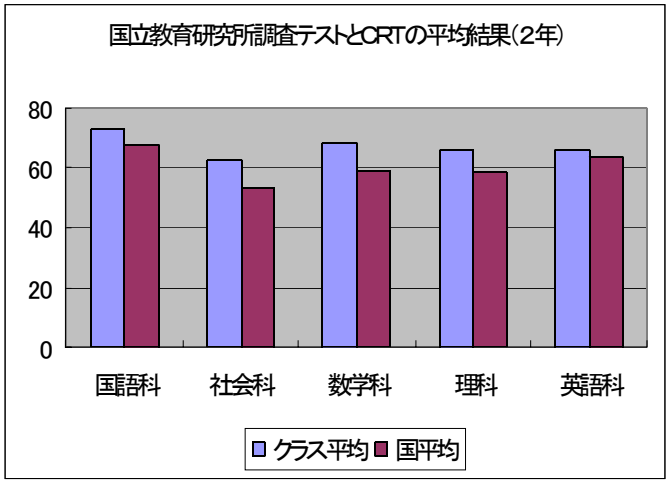
表4の（平成15年度）は現２年生の結果であるが，『表現活動の対話』を通して，他とのすりあわせの中で学習を深めていくという授業の価値を，徐々にではあるが実感できつつあるクラスでもある。

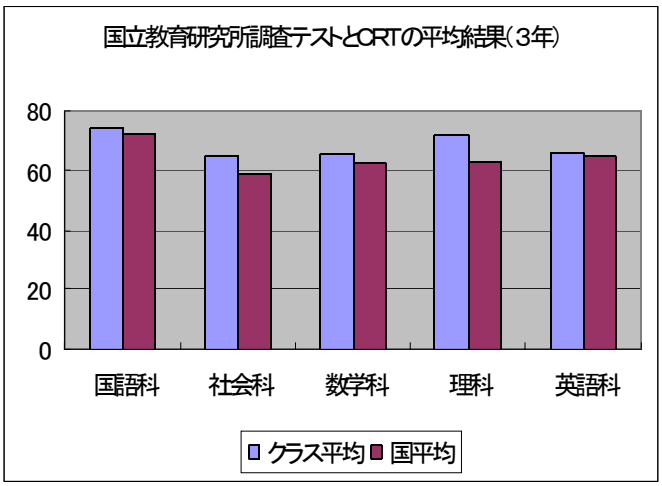
次の４つの表は国立教育研究所調査テストとＣＲＴテストの平均結果（平成15年度3月実施）である。数学と理科については，思考力を問う領域について，それぞれ生徒の考えを共有する場面や理科実験考察レ

○国立教育研究所調査テストとCRTの結果







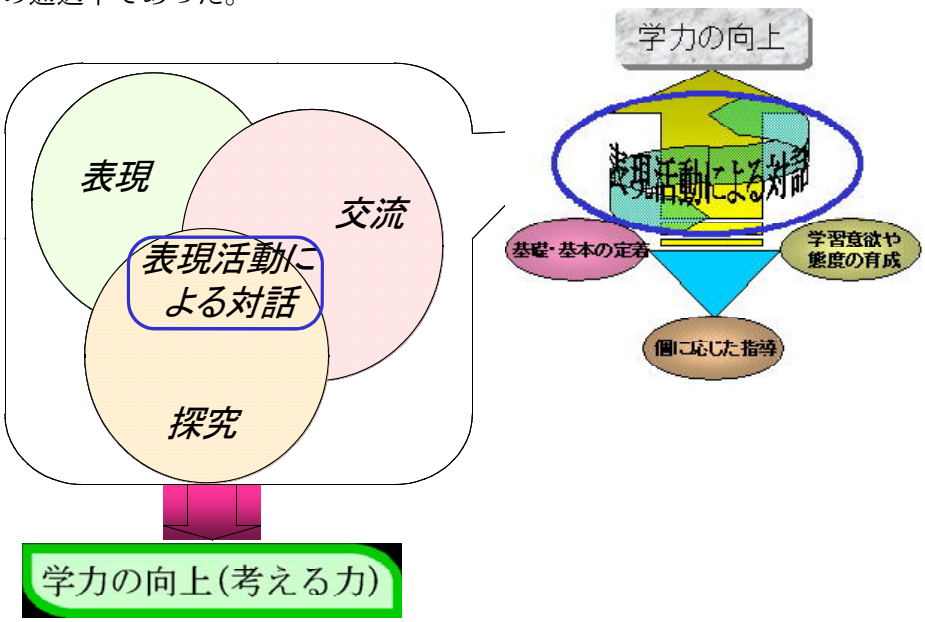


ポートを大切にした授業を心がける中で一定の成果が見られる。その他５教科においても，全教科研究構想に迫る実践を通して，全体平均は国平均をおおむねクリアし，特に社会の「技能表現・知識理解」の領域においては＋１０ポイント弱の通過率であった。

（３）研究の具体

次の３本を柱とした「表現活動による対話」による学力の向上（考える力）

・学習意欲や態度の育成
・基礎・基本の定着
・個に応じた指導



○『表現活動による対話』を通しての学力の充実

・表現，交流，探究（練り合い，磨き合い）等，構造的に細分化し各教科の特色を生かしながら研究推進を図っていく。

（表現）→ プレゼンテーション能力
芸術活動を通した五感を使ってのコミュニケーション能力

（交流）→ 言語コミュニケーション
メディア等を媒体にしたコミュニケーション

（探究）→ 問題解決能力

・考える場の設定やその取り方を工夫し，日頃の表現活動の場をカリキュラムや諸行事の中に仕組んでいく。
・活動と評価の一体化を考え，他者を評価していくプロセスを通して，内発的意欲や共感的資質を喚起させていく。

○指導法等の工夫改善

単元の導入ではＴＴ指導・少人数指導をしながら，確認テスト等でより個に応じた習熟度別少人数指導を展開し基礎・基本の定着を図っている。

それ以外にも学習内容によっては次のように，同質の少人数を指導内容ごとに交互に入れ替えて行う指導で一定の成果を上げている。

◇仮説

学習課題別や解法過程別を交互に入れ替えて指導する少人数指導は，　一単位量に注目した文章題ごとの解法の定着に有効であろう

◇調査方法

調査対象は管内から中学校４校の中学二年生のうち，以下に説明する二回のテストに両方出席した２５９名である。テストとは，連立方程式の単元に入る前に，一年時に学習した一次方程式の学習結果を調べるための「レディネステスト」，および連立方程式の単元終了後に行った「授業後テスト」である。このテストの結果に関し，授業方法として，①従来型の一斉指導　②少人数指導で，同じ先生がいくつかのやり方を同じグループに教える　③少人数指導で，違ったやり方を二人の先生が手分けをして別グループに教える，という３条件の比較を行った。上記の４校のうち，２校では従来型の一斉授業を，１校では②のタイプの少人数指導を，１校では③のタイプの少人数授業を行っている。

◇検証

レディネステストに関しては，各グループの平均に有意の違いは見られなかったが，授業後テストに関しては①と③の間に，T 検定により５％有意の違いが確認された。（他グループ間には有意な差はなし）

→分析結果１

次にレディネステストの点数ごとに授業後テストの結果をマッピングした結果である。

右上のグラフのうち三つの直線はそれぞれの方法における各個人のテスト結果の点の１次回帰直線である。この違いから，①の一斉授業のグループと比べ，③のタイプの少人数授業はレディネステストの結果の比較的悪かった生徒においても，比較的良かった生徒においても，授業後テストの結果が向上している傾向が見られた。なお②のタイプの少人数授業では，レディネステストの結果の良い生徒の成績は向上しているものの，良くなかった生徒に関しては，一斉授業の場合と結果は変わらない傾向が見られた。　→ 分析結果２

分析結果１

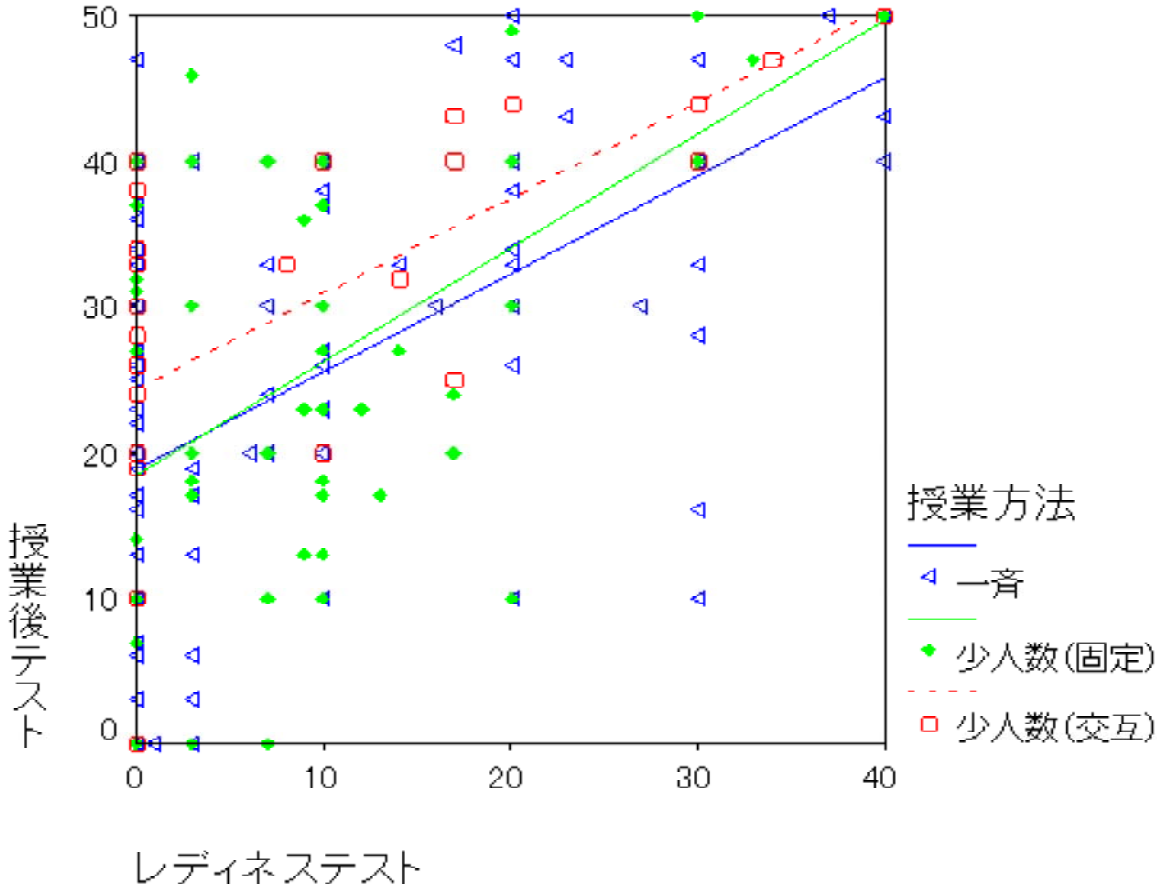
授業方法と成績の関係（平均点）

授業方法		レディネステスト	授業後テスト
一斉	平均値	6.92	23.53
	人数	159	159
少人数（固定）	平均値	8.26	24.83
	人数	70	70
少人数（交互）	平均値	8.23	29.77
	人数	30	30
合計	平均値	7.43	24.60
	人数	259	259

◇結論

数学において，少人数クラス指導を実施しさらに授業の工夫を行うことにより，成績のもともとよかった生徒もよくなかった生徒も，その理解度を上げることができることができる。

分析結果２



※本分析は広島大学教育開発国際協力研究センター講師　小原一馬先生の協力によって行われたものである。

2　今後の課題

○一層の教材研究を深め，生徒の多様性に対応できるコースの設定，ワークシートを開発していく必要性

・ｉｎｐｕｔだけにならず，ｏｕｔｐｕｔにつながるワークシートの工夫

・導入時における『表現活動による対話』を促すに足る教材開発

○習熟度別コース学習の優越感や劣等感を生じさせない配慮

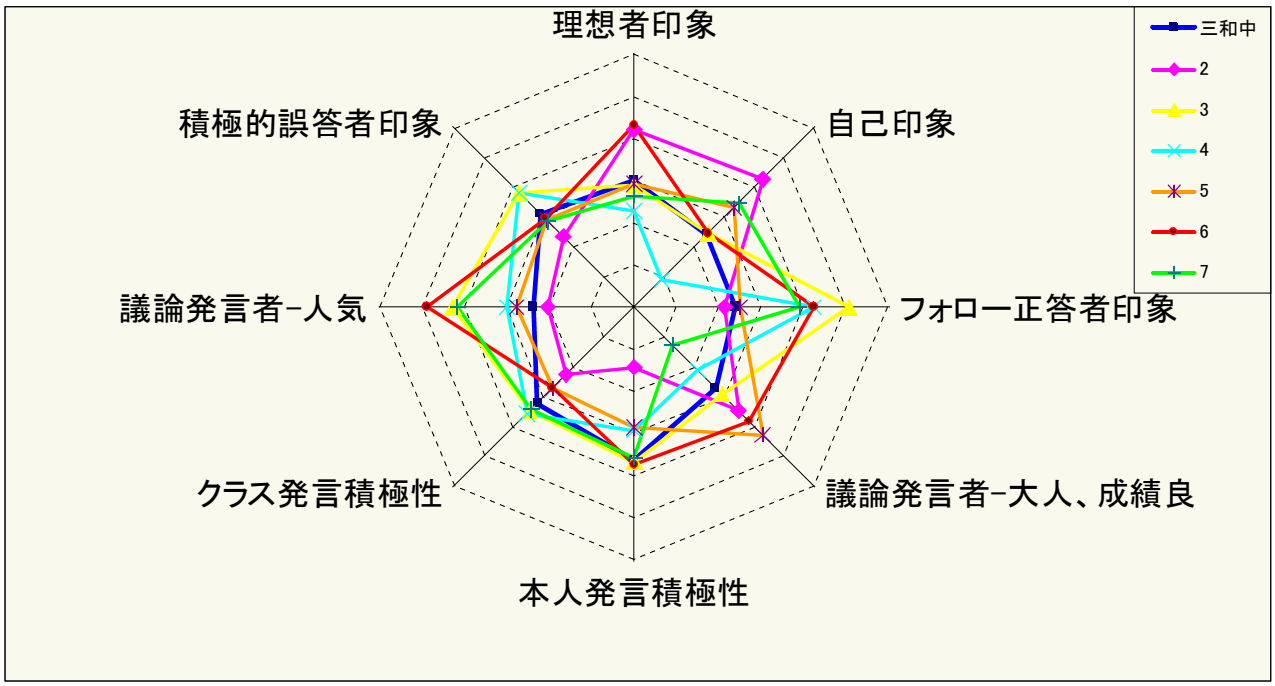
・生徒実態や教材単元の特色を考慮し，より学習展開の深化がはかれるように

・単に能力別コース学習にならないように留意し，小単元ごとのレディネステスト，確認テスト，アンケート等，生徒の自己選択能力を高め次へステップが見定められるものを提示し，固定化しない。

○「学びの力」を育む，日々の見取りや評価と活動を一体化した指導の在り方

・レポートや作品に対しての評価を教師が与えるばかりではなく，個々の生徒に対する思いやメッセージといった自己評価を聞き入れながら，よかったところだけでなく，問題点・改善点にふれながら評価していくスタンスの必要性がある。

クラスにおける生徒の発言の活発さと発言者のイメージ（アンケート分析）



【三和中の傾向】

学校全体としてはほぼ平均的で，発言も少なくはないが，議論での個性的な発言者の人気は他校ほど高くない。

　このことから，単発的な発言はある程度するが，議論場面でのいい意味での意見のぶつかり合いや思考場面での個の考えを表現・発表することに良いイメージをもっていないといえる。即ち，授業におけるコミュニケーション活動を通じて知識を体得し学習を深めていこうとする価値が不十分であると考察できる。

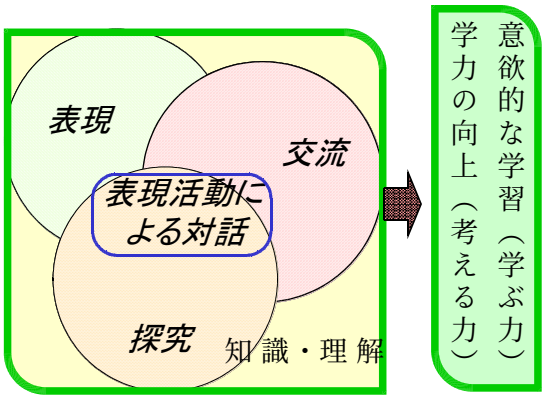
「表現活動の対話」の深化

○「集団で学習している良さを実感させる。」授業の創造

　各教科における単元の特色やねらいを見定め，また，生徒実態を考慮したとき，どこでこのような学習展開を図るのかを精選することも必要である。

・伝え合う力（表現）
　　「聞く」→「考える」→「発表」
・練り合う力（交流）
　　「話し合う」→「考える」→「説明する」
・問題解決能力（探究）→「学びの力」

学習とは，こういう営みを通して育まれていくものだということを生徒に意識させる
（こういう授業形態の価値を認識させる。）



○『表現活動による対話』を通しての価値観を磨き合う「他者評価」のあり方
・「振り返り」や「みとり」「磨き合い」といった評価の場が設定され，保障されて行かなくてはならない。
・「授業の振り返り」に関しては自己評価を，調査体験や話し合い学習などのコミュニケーション活動における「みとり」や「磨き合い」においては教師や仲間からの他者評価相互評価を構成したい。学習内容と方法の両面からの評価スタイルを工夫・改善していく必要性がある。
・自己表現で終わりではなく，それを他者はどのように受け止め，評価するかというキャチアップ的な視点が重要といえる。，そこから啓発なり，思考を絶えずリフレッシュさせ，発信させていきたい。
・他者評価カードの工夫により，自己が気づき得なかった発表内容や発表の仕方に対する良さを体感でき，そこから新たな内発的な学習意欲が喚起されるようにしたい。

○「表現活動の対話」を進めていく上で，生徒実態やそこに影響を与える様々な要因を分析する必要性

○教師対教師，生徒対教師，生徒対生徒の人間関係

○小中連携について
・各部会での取り組みに対して定期的に交流・考察をして，各小中学校現場にレスポンスよくフィードバックしていく必要がある。
・せっかくまとめられたデータから，良いもの・共通課題は何があるのかを検証し，次への具体の取り組みにつないでいく必要がある。（学習環境，基礎・基本部会）
・学習環境部会，基礎・基本部会で研究している内容の相関関係を検証・考察していくことも今後の展開のひとつになる。
・来年度に向けての理論学習の方向性（教育課程部会）
　小学校，中学校の共通点の授業づくり視点を明らかにしていく。

◇ 確かな表現力 ＝ 表現活動による対話 ➡ 表現力
　三和小学校　　三和中学校

◇共通のサブテーマ（指導法の工夫・改善）

少人数指導 →指導形態・内容をより意識しながら子どもの自己選択能力をたかめていく。

その他　例として

小学校のノート指導 ―― 中学校のワークシート

小中合同でやっていること，連携していることがどう生きているのか。
互いによく理解し，検証も必要。

Ⅳ．学力把握のための学校の取り組みについて

○情意面の変化・・・・・・・・・・・・・生徒の意識調査（９・２月）　自己評価
相互評価　観点別評価　アンケート
○認知面の変化・・・・・・・・・・・・・基礎学力定着度テスト　定期テスト　単元テスト
実力テスト（１・２年生２回，３年生５回）
県の学力調査テスト実施（年１回）
国立教育研究所の学力調査テスト
小テスト　５分間テスト（確認テスト）
ＣＲＴ

Ⅴ．フロンティアスクールとしての成果と課題の普及について

○平成１４年　１１月１日　三和中学校
（備北地区教育事務所，瀬尾指導主事，備北地区教職員，三和中保護者，三和町教委）
三和中学校公開授業研究会（全学級）
「テーマ：意欲的な学習活動をうながす指導」
・少人数・習熟度別学習指導（国数英）授業反省
・三和中学校の実践発表並びに研究協議

○平成１４年度学力向上フロンティア事業研究のまとめを発刊
県教育委員会，県下フロンティア推進校，備北事務所管内各地区教育委員会　配布

○平成１５年　１１月７日　三和小学校　三和中学校
（県教委，備北地区教育事務所，県内教職員，三和小中保護者，三和町教委）
三和小学校・中学校合同公開研究会
「テーマ：自ら学び，自ら考える力を育てる指導」
・各小中学校授業公開，実践発表，小中連携研究発表
・三和小中学校研究紀要発刊

○研究普及のためのＨＰ作成，更新

○平成１６年１月２７日　三次市福祉保健センター
平成１５年度学力フロンティア事業に係わる発表会
（県教委，備北地区教育事務所，各市町村教育委員会職員、備北地区協議会教職員）

○平成１６年２月２０日　第３回学力向上推進協議会　東広島市中央公民館
（広島県教育委員会，県内教職員）
「テーマ：考える力の育成」～確かな学力に向けた次のステップへ～
三和中学校フロンティアティーチャー：パネラーとして出席

○平成１５年度学力向上フロンティア事業研究のまとめを発刊予定

○平成１６年　学力向上フロンティア事業最終年度公開研究会　１１月予定

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　☑３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
☑その他

【研究教科】　☑国語　☑社会　☑数学　☑理科
☑外国語　☑音楽　☑美術　□技術・家庭
□保健体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無